

音 楽 科

渋谷 知 宏

I 研究主題と音楽科

1. 研究主題のとらえ方 - 教科の「目指す生徒像」

音楽科では、研究主題を踏まえ、本教科で目指す生徒像を次のように考え、2年次の実践に取り組んできた。

【音楽科の目指す生徒像】

音楽表現の豊かさを味わい、音や音楽の捉え方を広げることができる生徒

音楽科では、表現や鑑賞の幅広い活動を通して、音や音楽のよさや美しさなどの魅力を感じ取りながら考え、自分なりに理解し、音や音楽と豊かに関わる喜びにつながることを大切にして授業づくりを行っている。〔共通事項〕の学習を支えとして、音楽を形づくっている要素のはたらきについて実感を伴いながら理解すること、音楽として表現するための技術や発声などの基本的な技能を高めていくことで、自分なりの思いや意図を音楽表現に生かすことができるようになると考えている。それが高まっていると生徒自身が実感したとき、更によりよいものを目指したい、もっとやってみたい、もう一度演奏したい、聴いてみたいという主体的な活動へとつながっていくと考える。生徒が音や音楽と出会う場面を大切に、一人一人が音楽的な見方・考え方を働かせて、音や音楽と豊かに関わるができる生徒を育てていきたい。

2. 研究のあゆみ

目指す生徒像に迫るために、資質・能力が発揮されている姿を具体化し、次のように整理した。

【3年間で目指す具体的な生徒の姿】

重視して育てる 資質・能力	教科で育てる資質・能力	手立て
よりよいものを求める探究心や自主性、社会性	・音楽活動を通して、音楽のよさや美しさなどを深く味わおうとする態度	・生徒の興味・関心を高める魅力的な課題や題材を設定する。
知識や技能、経験の生かし所を見いだす力	・音楽を形づくっている要素のはたらきを知覚したことと、音楽のよさや美しさなどを感受したことを関連させる力	・共通事項に示されている要素のはたらきをとらえる場を設定する。 ・音や音楽の感じ方を広げるために、「感じシート」を掲示する。
場に応じて判断基準をつくる力	・知覚・感受したことを生かして、音楽表現を創意工夫する力	・発声、奏法、記譜などの音楽表現するための技術指導をする。
学びを評価し、課題を見付ける力	・音や音楽を聴き、音楽の感じ取り方の多様性を理解する力	・他者の考えを共有・共感できる場を設定する。 ・音楽を自分なりに解釈したり、他分野や自己の生活と関連付けたりするために、様々なジャンル楽曲から教材を選択する。

音楽科では、教科として育てる資質・能力として、特に「音楽を形づくっている要素のはたらきを知覚したことと、音楽のよさや美しさなどを感受したことを関連させる力」、「知覚・感受したことを生かして、音楽表現を創意工夫する力」を重視して、研究に取り組んでいく。

「音楽を形づくっている要素のはたらきを知覚したことと、音楽のよさや美しさなどを感受したことを関連させる力」については、〔共通事項〕に示されている音楽を形づくっている要素のはたらきが、実際の音や音楽の特徴や曲想とどのように関わっているのか、何度も演奏したり聴いたりしながら、生徒たち自身が実感できる体験を大切にしていける必要がある。そのために、知覚・感受したことを言葉や体の動きなどで表したり、演奏を比較させたりする。また、互いに気付いたことや感じたことなどについて言葉や音楽で伝え合い、音楽的な特徴について共有したり、感じ取ったことに共感したりすることで、音や音楽の捉え方が広がっていくと考える。

「知覚・感受したことを生かして、音楽表現を創意工夫する力」は、どのように音楽表現するか思いや意図を持たずとも、それを音楽表現に生かすことができないと、生徒の達成感は高まらず、より高次なものを求める姿につながらない。そのため、知覚・感受したことを基に、どのように音楽表現するか、試行錯誤する場を設定する。加えて、その思いや意図を音楽で表す手段はこのような方法があるといった、生徒の思いや意図と音楽表現をつないでいくための技術的な面を高める工夫を講じていく。こうした学習を積み重ねていくことで、生徒が自身の成長を実感し、よりよい音楽表現を追究したり、音楽のよさや美しさをより深く味わって聴いたりする力が育まれていくと考えている。

3. 教科としての振り返り

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

- 生徒たちは様々な音楽活動を通して、よさや美しさ、楽しさを味わっていた。題材設定や音楽に興味・関心が持てるような課題を提示することで、活動に意欲的に取り組んでいる生徒が多いと感じる。また、音が重なってハーモニーができたときに美しいと感じたり、できなかったことができるようになったりしたときに達成感を持ち、なぜそれが関連するのかといったことを考えることで充実感につながっているようである。今後も、題材や課題設定の工夫、自己の技能の高まりがよりよいものを目指していく原動力となるよう意識していかなければならない。
- 生徒自身が感じ取った曲想と音楽的な要素のはたらきを関連付ける力が高まってきていると感じる。生徒に対して実施したアンケートにおいて、自己のイメージと音や音楽の諸要素が結び付いていることに気付いたときに、新しい発見に感動したり、面白い、楽しいと感じたりしている生徒が多くなってきた。「なぜそう感じたのか」「要素がどうなっていたのか」というような問いかけを繰り返し行ってきたことがこのことにつながっているのではないかと考えている。
- ▲生徒自身が感じ取った曲想と音楽的な要素のはたらきを関連付ける力が高まってきている反面、指導者の問いの質を高めなければならないと考えている。補助的な発問や要素の絞り込みがないために視点が定まらず意図したものと異なる反応になってしまったり、気付いているのに実感を伴いながら理解するまでに至らなかつたりすることがある。生徒たち自身が感じたことを、どのように音や音楽で確かめる場を設定するか、生徒個人が気付いたことをどのような手法で共有するか、さらなる工夫が必要である。
- ▲音楽表現を創意工夫する場面において、楽曲のよさや音楽の要素のはたらきを理解することはできたが、実技で生かそうとしてもできなかつたり、難しさを感じたりしている生徒、どのように生かしたらよいか分からずにいる生徒の数の変化は少なかった。自己の演奏技術に不安がある生徒や、演奏することで精一杯という生徒への技術指導を継続的に行い、音楽表現をするために必要な技能を伸張させたい。また、生徒たちは音楽表現を工夫するというと安易に「強弱を工夫する」と答える生徒がとても多い。音楽を形づくっている諸要素のはたらきに注視させる題材や教材開発も必要だと感じる。

次に、実践事例を紹介し、実践から見えてきた具体的な成果と課題を報告する。